宇多津「古街」コマチ

地割

江戸時代に古街の都市計画はほぼ完成、現在まで受け継がれる。東西の高松－丸亀街道と南北の金毘羅街道を軸線とし、格子状に街路がつくられている。先人たちの知恵がこの時代に結晶、現在のまちの美しさ、暮らしやすさにつながっている。

街並みと風習

宇多津の「古街」には、古くからの信仰の影響を受けた社や祠が数多く点在している。現在も集会所として使われているヤシロもあり、これらの存在が地域のつながりを支え、コミュニティを結びつける役割を果たしている。

「お日待ち」という風習は、古街の各地区に伝わる伝統行事であり、一夜を明かすことを意味する。本来は祭日を迎えるための「一夜の忌」として行われていたと考えられているが、単なる祈りの場にとどまらず、ご近所同士が集い、ともに食事を楽しむ場としての側面もあった。

また、金毘羅灯籠や道しるべ、鳥居は、この地が街道の起点であることを示している。さらに、金毘羅遥拝所や社が点在し、古くからこの街の人々に根付いた金毘羅信仰の姿を垣間見ることができる。

年中行事

宇多津古街には、人々の間に伝わってきた多くの行事があります。

＜1月＞　初釜神事（復元塩田）
＜3月初旬の土日＞　うたづの町家とおひなさん
（各家の雛人形を公開）
＜5月＞　西光寺市（西光寺）・平山祭（平山神社）
＜7月＞　朔日祭（宇夫階神社）（旧暦6月1日）
＜7月＞　十七夜祭（神石神社）（旧暦6月17日）
＜8月＞　早祓祭・茅の輪くぐり（宇夫階神社）（旧暦7月1日）
＜8月16日＞　閻魔堂ご開帳・地獄極楽図の絵解き（浄泉寺）
＜8月＞　灯篭流し（各寺）
＜10月第4土日＞　秋の例大祭（宇夫階神社）

宇多津の秋祭り

宇多津の秋祭りは、街並みを活かした華やかな行列と、御旅所までの長い道のりが特徴である。祭りで使われる道具の一つひとつには、それぞれ意味が込められている。

中でも、太鼓台の担ぎ方は独特であり、一度地面に叩きつけた後、力強く担ぎ上げるその姿は圧巻である。祭りのルートは、西から東へ、そして南へと、古街を練り歩く。宇多津が誇るハレの日の賑わいを味わうことができる。

運行スケジュール

塩竈神社の例大祭、宇夫階神社の例大祭で構成、10月第四週の金・土・日に開催。金曜・土曜の夜の各「宵宮祭」で里神楽の奉納が行われる。

また、10月10日深夜には、宇夫階神社に伝わる御鳥喰神事（おとぐいしんじ）の「初白祭（はつもうしさい）」が執り行われ、宇多津の秋祭りの幕開けを告げる。

街と町名

街路をはさんで向かいあう家々が一つの町をつくっている。江戸時代以来の歴史をもつ、本町・浦町・今市・鍛冶屋町・水主町（かごまち）・伊勢町・倉の前・浜町・西町・横町・海岸町・山下・大門・田町・新町・塩浜などがこれにあたる。現在の自治会は、この町名とまとまりを引き継いでいる。

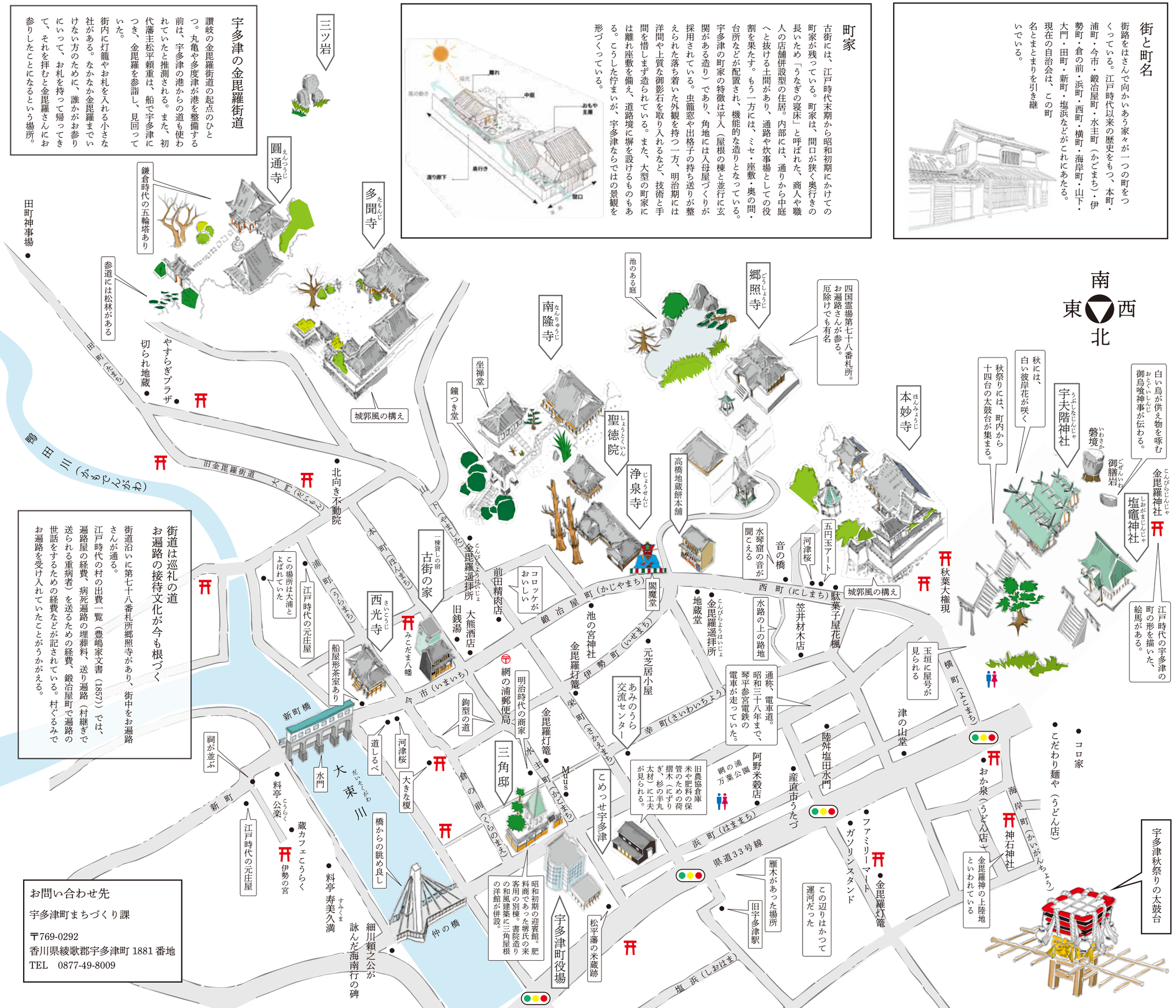
町家

古街には、江戸時代末期から昭和初期にかけての町家が残っている。町家は、間口が狭く奥行きの長いため「うなぎの寝床」と呼ばれた、商人や職人の店舗併設型の住居。内部には、通りから中庭へと抜ける土間があり、通路や炊事場としての役割を果たす。もう一方には、ミセ・座敷・奥の間・台所などが配置され、機能的な造りとなっている。宇多津の町家の特徴は平入（屋根の棟と並行に玄関がある造り）であり、角地には入母屋づくりが採用されている。虫籠窓や出格子の持ち送りが整えられた落ち着いた外観を持つ一方、明治期には洋間や上質な御影石を取り入れるなど、技術と手間を惜しまず造られている。また、大型の町家には離れ座敷を備え、道路境に塀を設けるものもある。こうした佇まいが、宇多津ならではの景観を形づくっている。

宇多津の金毘羅街道

讃岐の金毘羅街道の起点のひとつ。丸亀や多度津が港を整備する前は、宇多津の港からの道も使われていたと推測される。また、初代藩主松平頼重は、船で宇多津につき、金毘羅を参詣し、見回っていた。

街内に灯籠やお札を入れる小さな社がある。なかなか金毘羅までいけない方のために、誰かがお参りにいって、お札を持って帰ってきて、それを拝むと金毘羅さんにお参りしたことになるという場所。



街道は巡礼の道 お遍路の接待文化が今も根づく

街道沿いに第七十八番札所郷照寺があり、街中をお遍路さんが通る。

江戸時代の村の出費一覧（豊嶋家文書（1887））では、遍路屋の経費、病死遍路の埋葬料、送り遍路（村継ぎで送られる重病者）を送るための経費、鍛冶屋町で遍路の世話をするための経費などが記されている。村ぐるみでお遍路を受け入れていたことがうかがえる。

お問い合わせ先

宇多津町まちづくり課

〒769-0292
香川県綾歌郡宇多津町 1881 番地
TEL　0877-49-8009